



TITLE:

房総のニホンザル：その分布と生態 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

高杉, 欣一; 岩野, 泰三; 上原, 重男; 福田, 喜八郎; 小
金沢, 正昭

CITATION:

高杉, 欣一 ...[et al]. 房総のニホンザル：その分布と生態(Ⅲ 共同利用研究
2.研究成果). 霊長類研究所年報 1975, 5: 33-34

ISSUE DATE:

1975-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162654>

RIGHT:

6. 霊長類の生殖に関する基礎的研究

申請4件(6名) 採択4件(4名)

B. 自由課題

申請21件(44名) 採択12件(18名)

研究会課題に関しては、公募に際し特に設定主題は提示されなかった。運営委員会の議を経て7件が採択されこれらの研究会のテーマを列記すればつぎのとおりである。

〔共同利用研究会〕

1. ニホンザルの現況

2. 主としてニホンザルと対象とした行動の研究

3. 脳と行動

4. 霊長類と食虫類・翼牛類の系統・進化

5. ロコモーション・ワーキング・グループ

6. ホミニゼーション

7. 霊長類タンパク質の構造・機能・進化

これらの共同研究課題、研究会に使用された費用は研究員等旅費 692.6万円、校費 412.3万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大巾な増額が望まれる。
(久保田鏡)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

房総のニホンザル——その分布と生態——

高杉 欣一(東大・農)

岩野 泰三(同上)

上原 重男(京大・理)

福田喜八郎(東大・農)

小金沢正昭(東京農工大・農)

房総のニホンザル調査は、房総の地域的自然全体とのつながりあいのなかでニホンザルを浮き彫りにしうるように、著者等以外の多くの人々の協力を得て、きわめて包括的・永続的な調査として行なわれている。一面では人々の自然への渇きをみだし、他面ではその当然の帰結として付随する自然保護運動と表裏一体をなしながら、あまり遠くない将来のある日、人間自身について——とくに人間の自然的基盤と文明の現状について、組織的に論及しうようになるだろうという予測をもって行なわれている。この調査は、利用できるすべての研究予算を投入した上に、多くの人々のボランティア活動によって支えられており、また一面では、人々の努力を相互に関連づけて、あわせて「ひとつの調査」として成り立ちうるよう充分に配慮はしているが、一人一人の作業としては単純素朴であって、一定期間フィールドへ出たら自分の目にふれた事実を一定の様式に従って整理記載し、採集品も同様に一定の方法で処理保存し、それらすべてを一ヶ所に集めて通覧しうるようにしているにすぎない。

上記のような調査の実態から、どの成果はどの研究費に対応するという性質でもなければ、経過報告としても研究費の出所別にはなしにくい。しかしわれわれのグループ研究も年を重ねてようやくとりまとめの段階に入った部分ができたので、別掲文献リストに1974年度中に発表したものをすべて収録した。上記のような調査の実態から明らかなように、別掲文献リストに含まれたす

べてのものに「共同利用研究費」も部分的に貢献している。

1974年度中の主たるトピックスとしては、高宕山のT-I群の個体識別が完了し、西部地域の分布域の修正がなされ、フン分析に基いて房総におけるニホンザルの食性の季節的变化がまとめられたが、これらはすべて千葉県委託調査の報告書のなかに述べられているのでここにはくりかえさない。

1974年秋の第4回一斉調査時に、元清澄地区で野生群の空間的広がりについて若干の興味ある資料が得られ、また1974年末から1975年春にかけて、新たに詳細な食いと調査が行われ、冬季の主要食物植物4種について、利用状況の時期的変化が詳細に記載されたので、これら2点について以下に報告する。なお他に新たに始められたものとしては、1974年12月から、台倉に房総自然博物館の宿泊の便が得られるようになったのを機会に、現地で処理できていどの簡単なものだが、月別にT-I群のフンについて寄生虫の調査が行なわれている。

1. 元清澄地区におけるニホンザル野生群の空間的広がりについて

高宕地区では、地形・植生条件からも、餌付け等の人間とのかかわりあいの点からも群れの直接観察が比較的容易であり、従って群れを相互に正確に識別しうるが、元清澄地区では、常緑樹を主とする比較的自然なうつつ森林が多く、餌付け等の人為が一切加えられてない、その点では全く理想的な野生群の観察が期待されるのだが、山頂部がなだらかに広がり、常緑樹の厚い葉層が視野をふさいでしまうため、群れの継続的な直接観察がきわめて困難である。

1972年の一斉調査以来今日までに積み重ねられた資料によって、元清澄地区の群れの数や、それらの全体としての分布域についてはいよいよ強固に確信するにいたっ

ているが群れを特定し、どの群れがどれほどの周年的遊動域をもち、相互に隣接する群れ間でどのように関係しているかについては、逆に疑惑を深める結果になった。アルビノ1頭を含む若干の個体がほぼ確実に識別されてはいるものの、それは群れを特定するにはあまり不十分にしか利用できず、従来、最初の発見ないし聞き込み地点を手掛りにして、順次 M-No. をふって群れの名のごとくに利用してきた番号が、事実上地理的な相対的位置関係の言い換えにすぎないことが明らかになってきた。

群れが特定できないのは、折角得られた資料が不十分にしか活用できず致命的なので、以前からいわゆる M-4 地域を中心に集中調査地区を想定し、そのなかに、うまく死角をなくすように3ヶ所1組の固定観測点を設けて継続的な定点観察を行おうと準備をすすめてきたが、予算の点で暗礁に乗り上げ展望を失った。そこで、環境破壊もせずサルたちにも悪影響を与えずに、観察方法上の工夫で群れがわれわれにとって「見えるもの」であるという最低限のデモンストレーションとして、秋の一斉調査時に若干の試みをなしかかなりの成功をおさめた(別掲文献リスト、文献1参照)。

秋の一斉調査は1974年10月18日から11月2日の15日間にわたり計46名で行なわれたが、予定された集中調査地域でうまく群れの捕捉できた10月29・30日、11月1日の3日間に延べ16時間55分の継続観察ができた。すなわち群れをとりかこむように位置した数人の観察者が、1/5,000地形図をベース・マップとして、その上に直接サルをみるか声または明らかな物音を聞く度に時刻と位置を記入する方法をとった。この資料を、観察地域をあらかじめ50mの方眼に切った図上に5分ごとにとりまとめ、時間の経過にともなう、群れの広がりやどのように変るか、また各方眼内の観察頻度がどのように変るかについてとりまとめた。もしも少規模な一斉調査を頻繁に繰り返せるならば、停止採食時・ゆるやかなまたは速かな移動時の群れの広がり、その中での個体の集中・分散の状態の変化について多くの資料を得ることができであろう。もちろん、一部の個体については個体識別も可能になってくるであろうと思われる。

2. 冬半年の食いと調査

この調査は、元来は前項でのべた M-4 地域の集中調査の1部として行なわれたものであるが、ここではフン分析に基いてとりまとめられた食性の季節的变化との関連でのみ述べる。郷土周辺のいわゆる M-4 地域の全面をほぼ一様に覆う総延長 15.8km の調査ルートにそって、冬季の主要食物植物であるイヌビワ・ヤマグワ・ネムノキ・ハナイカダの計4種につき、発見される限りの個体に番号をふって個体識別して位置図を作成した。調

査木は前出4種の順に、132本・32本・44本・215本の計423本で、これらを1974年の暮れから4~5週間おきに計4回、1975年の5月はじめまで、いつどの木が(一部はどの枝が何cm位)食われたかを調査した。各期間に食われた木の分布はかなり場所的にかたよりを生じているが、それは群れが各期間にどのように遊動していたかを示す資料となるものであるが、ここではふれない。

まず最初にくわれ量的にも著しいのはイヌビワの冬芽(とそれにつながる枝先)である。12月になってイヌビワの冬芽食が著しくなると、房総のサルたちに冬が始まったなと思うのが、見事にあとづけられた。これは2月はじめまで、それ以降急激に減少する。次いではヤマグワ(冬芽)ネムノキ(葉痕)が食われ、ハナイカダが最後になり量的にも少い、一般に葉痕食い樹皮食いは早春に著しく、冬芽・枝先食いが暖帯の遅い初冬から厳冬期を特徴づけるのと著しい対照をなしている。

1) 文献リスト

1. 房総丘陵ニホンザル調査隊(文責:福田喜八郎) 1975. 第4回房総丘陵ニホンザル一斉調査報告—1974年秋季の調査から—, 房総の自然研究会 東京大学農学部付属演習林, 1-5.
2. 房総の自然研究会(編集:小金沢正昭), 1974房総丘陵のニホンザルの植物性食物リスト, 雑誌にほんざる No.1. 177-192.
3. Fukuda, Kihachiro. 1974. A Japanese Monkeys Population in the Boso Mountains: Its Distribution and Structure. 20-21. Abstract. 5th Congress of IPS. Nagoya.
4. 長谷川寿一, 1974. 誰がサルにケンカをさせたのか?—高岩山自然動物園のニホンザルの負傷について—, モンキー, 18-5: 6.37-39.
5. Iwano, Taizo. 1974. Distribution of Japanese (Monkeys *Macaca fuscata*). 21. Abstracts. 5th Congress of IPS. Nagoya.
6. 岩野泰三, 1974. ニホンザルの分布, 雑誌にほんざる No.1. 5-62.
7. 岩野泰三, 1974. 発掘された半世紀前のニホンザルの分布資料, モンキー, 18-5: 6. 22-23.
8. Koganezawa, Masaaki. 1974. Food Habits of Japanese Monkey (*Macaca fuscata*) in the Boso Mountains. 20. Abstracts. 5th Congress of IPS. Nagoya.
9. 小金沢正昭・高杉欣一 1975. ニホンザルの食性の季節変化—フン内容物分析の結果—昭和49年度天然記念物高岩山のサル生息地総合調査報告書(沼田真団長)千葉県教育委員会, 富津市教育委員会, 君津市教育委員会, 46-52.
10. Uehara Shigeo. 1974. An Importance of the Temperate Forest Elements Among Food Woody Plants Utilized Monkeys and Its Possible Historical Meaning for Establishment of the Monkeys Range. 21-22. Abstracts. 5th Congress of IPS. Nagoya.